

図書館通信 — 52 —

1980. 7

浜松分館長の退任に当って

工学部 井本文夫

今年(1980)の4月末日で浜松分館長の任期を無事満了することができました。これもひとえに、各年度の分館図書委員各位並びにそれぞれの立場でベストを尽くされた分館事務の皆様方の御協力の賜と深く感謝しております。

静岡での図書館委員会には、工学部委員としての2年を含めて、都合6カ年のおつき合いになりました。この間の図書館長は、上野(理)、中澤(教)、渡辺(養)、豊川(人)の各先生方で、いずれもひとかどの人物でしたが、性格的には選出学部の色が自然に反映されるもので、興味深くもありました。他の委員の先生方や事務局の方で、忘れられない人も多数に上ります。最近分館長が事情通になったためか、質問役や調整役に回るケースも多かったようです。以下思いつくままに問題点を挙げて、今後への期待を述べてみましょう。

文科系学部では図書自体重要な研究媒体で、それも古い資料ほど価値が高い場合が多いようです。この点、理科系の学部で発行部数の多い定期刊行物が重視され、古い資料は特殊なものを除いて顧みられないのと対照的であります。このためか、本館では図書への接し方が真剣なように感じられました。学生用図書の選定でも、分館ではかなり甘い面があったと反省させられます。専門書の選書にしても、教室任せでは偏りを生じるおそれがあり、図書館側でもつねに出版界の現況を把握しておき、求めに応じて各教室にアドバイスできる態勢が望まれるわけで、分館としても遅ればせながら、その方向への努力をして貰ってきました。

御存じの通り、3年ほど前に本館の増築と事務部長制の施行があり、図書館のグレードアップに大きく寄与しました。しかし内容面では予算の制約もあってあまり進んでいません。例えば、学生用図書購入費における学内充当率という問題があります。即ち本省積算額に対する学内負担額の割合のことで、この比の値が大きいほどグレードの高い図書館だというのですが、本学の場合はかなり立ち遅れています。しかし、先にも述べました通り学部の性格もあり、浜松キャンパスのように外国雑誌を重視する部局では、分館排架の雑誌点数を増すことで、学内充当率を上げて行くのが、無理のない方法だろうと思います。

もくじ

浜松分館長の退任に当たって
井本文夫(前浜松分館長)… 1

外国の大学図書館を利用して
バーミンガム大学図書館
棚橋克弥(教育学部)… 2

M. I. T. の図書館
北原和夫(教養部) …… 3

私のすすめたい本・37
事実を知るとのこと
渡辺安夫(教養部) …… 4

生物化学への誘い
水野卓(農学部) …… 4

大学図書館の夜間開館によせて
安藤実(人文学部) …… 5

自然科学系外国雑誌の利用
について …… 6

浜松分館だより …… 6

教官著作寄贈図書 …… 6

図書館委員会報告 …… 7

附属図書館委員会委員 …… 7

増加図書統計 …… 7

利用統計 …… 7

図書館からのお知らせ(本館) 8

人事異動 …… 8

昭和 55 年度編集委員 …… 5

さて、浜松分館には30種ほどの共通的な外国雑誌を排架しておりますが、最近さらに化学系外国雑誌の分館への集中配置を計画致しました。これは勿論本省予算の増額を期待してのことで、比較的まとまり易い部局から手をつけたわけですが、国家予算の効率的使用という面から、早急にすべての部局についてやるべきことだと思います。ただ図書館資料費の、学内での大幅増額は、すぐには困難と思いますので、著名なものや共通性の高いものから逐次分館購入に切替え、同時に重複購入分を減らして行くのが良いと思います。これができないようでは、研究図書館としての機能も、情報ターミナルとしての発展も望み得ないと思います。

こうして、教育、研究、保存、さらには情報図書館としての機能がほどほどに整ったとしても、利用者が近寄り難いようではなんにもなりません。生協書籍コーナーとは勿論性格が異なるにしても、店頭立ち読みのあの熱い雰囲気はいくぶんかでも浜松分館に持ち込めないものだろうか、指定図書制度利用による強制的引きつけも、講義担当の先生方をお願いしなければなりません、それとは別に、識らず知らずのうちに足が浜松分館に向くような、そんな魅力をどうすれば出せるだろうか。アイディアマンの新分館長、大月先生に期待して筆をおきます。
(前浜松分館長)

外国の大学図書館を利用して

バーミンガム大学図書館

教育学部 棚橋克弥

バーミンガム大学は、1978年現在、学部生6,768、大学院生1,708、研究教授陣1,057を擁するまでにはなっているものの、いわゆる'Red-brick universities'の仲間であって、オクスブリッジにくらべたら、大学の歴史はずっとみじかいし、規模も小さい。その図書館も、だから当然、蔵書の質や量の面で古い大学に劣ることになる。とはいっても、すでに100万をこえる図書を蔵し、そしてそれらは、大学の発展のあとを物語る増築が重ねられた建物の中に収められ、利用に供せられている。わたしはこのかいなでの旅人でしかなかったが、図書館の使命を自覚した運営の仕方が、蔵書内容以上にいかに大切であるかを強く印象づけられたのであった。

イギリスのたいていの図書館がそうであるように、ここも一部の稀覯本や古文書の類をのぞいて、全館が利用者に開放されている。しかも案内表示はきちんと掲げられているので、迷い子になることはない。わたしはあたかも古本屋のごとく書庫めぐりを楽しみ、思わぬ発見をしたことがしばしばある。この拾得——Serendipityの発現——は、開架方式であって始めて可能となる。

利用者を思う心は、たとえば、館内の随所にBook-finderを配置していることにもうかがえる。この器械(Micro-reader)にMicro-film(カセット)やMicro-ficheのカタログをかけると、どこに配架されているのか容易に判明する。カードを繰って探書するわずらわしさを知る者にとって、この配慮がどんなにありがたかったことか。

個人閲覧席の設備から感じられるのも、同じような配慮である。三大閲覧室(人文、社会、自然科学系にわかれる)は、とくに学期中は出入りがはげしく、どうしてもざわついてしまう。もっと静かな読書室を希望する学生は当然でてくるわけで、かくして各書庫の窓際に照明つきのコンパートメントが出現する。そこは読書の聖域とでもいふべき所であって、論文執筆中の学生がたてこもっていた。

入館証など不要、それに開架という図書館は、宿命的に図書の盗難に悩まされる。これを防止するのが出口に待ちかまえる係員の役目である。カバンに手をつっこむなど念入りに退出者の所持品検査をおこなう。教職員とて例外ではなく、顔パスは通用しない。ひとを泥棒視するこの種の検査は人権侵害だといきまく人がいたら借問したい。閉架方式からくる不便と開架方式からくる検査のどちらを甘受すべきなのかと。わたしの経験では、係員に非協力的な態度をとる者は皆無だった。

利用者の側にたつ図書館運営は、わたしが所属していたシェイクスピア研究所の場合、さらに徹底的であった。表口の鍵は資格ある50人ばかりの研究者・学生に手渡される。それは、各所有者が10万点におよぶ図書を昼夜を問わず随意に閲覧してよいことを意味する。外へ持ちだすことが禁止されるだけである。滞在中、20年ぶりに図書の総点検が実施され、約500冊不明という結果がでた。「それでも相互信頼にもとづく運営方式をかえるつもりはない。ご協力を」とある掲示を読んで、

胸にこみあげるものがあつたのを思い出す。

イギリスにおける図書館体験を通して、良き読者は親しみやすい図書館に育まれる、というわた

しの偏見はいつそうかたくななものとなった。

(英米文学)

M. I. T. の図書館

教養部 北原和夫

これまで、ベルギー国のブラッセル大学、アメリカ合衆国のMIT(マサチューセッツ工科大学)及び西ドイツのユーリッヒ原子核研究所に比較的長期にわたって留学する機会が与えられ、その間に他のいくつかの大学を訪ね、図書館を見学したり、利用したりしましたので、その経験を述べたいと思います。

まず、一般的傾向(少なくとも私の経験した範囲では)としては、ヨーロッパの大学とアメリカの大学とで、図書利用に関しては、少しニュアンスの相異があるように思います。ヨーロッパの大学の研究体制は、研究所(Institute)が各専門分野ごとにあつて、その図書室には、その研究所の専門分野の雑誌や単行本が大体揃っていますが、他の分野のものは全く置いていません。一般にヨーロッパの研究者は職人的意識が強く、研究テーマを絞って深くコツコツとやる傾向があるようです。また、雑誌や単行本に発表される前に、少数の同じ研究仲間間で情報の交換は十分行われていますから、図書が不十分でもそれ程不自由を感じないのではないかと、思います。図書室の雑誌は持ち出し禁止で、自分の居室で読みたい人はコピーをとって持ってゆく、ということが一般的ですが、文献をたくさんセッセとコピーする人は居ません。小さい研究所ですと、図書室は大体、人々のたまり場で、そこで雑誌をみながら、議論したり批評しあつたりという風景がみられます。

一方、アメリカの大学、及びドイツの新しい大学(エッセン大学、ビーレフェルト大学)は大きな図書館を持ち、そこに行けば、あらゆる分野の文献を手にすることができるというシステムをとっています。恐らく研究者の意識も、職人的なものとは違って、一つのテーマに関して多分野の人々が協力して参加する、という形の研究を求めているからだろうと思います。私はMITの化学教室に居たのですが、研究分野は物性論でしたから、化学、物理、時には生物関係の文献も必要でしたので、こういうシステムの図書館は非常に便利でした。

MITの図書館について少し紹介しますと、五

か所に分れています。「学生図書館」——これは学部学生の自習用で授業で使う参考書、辞書類が置いてあり、24時間、365日オープンです。毛布、歯ぶらし持込みで勉強している学生もいます。「自然科学図書館」——自然科学の雑誌、単行本が揃っている。「工学図書館」——応用科学、工学の文献が揃っている。「音楽図書館」——音楽関係の図書。「人文図書館」——政治、経済、法律などの図書。「学生図書館」以外の4つの図書館は朝8時から夜12時までオープン。雑誌は持ち出し禁止ですので、必ず求める雑誌をみることができます。大体、夜の疲れた時や、週末などに、図書館に行って最新の雑誌に目を通すことにしていましたが、他の人々もそうしているようでした。前に述べましたように、最近の自然科学は、他の分野にも関心をもち、時には、そこへとびこんでいって協力して新しいものを創造する、という学際的なものを重要視する傾向があると思います。MITの図書館のシステムはそういう雰囲気の中から生まれてきたのでしょう。もう一つの特筆すべきことは、MITの学内施設は、図書館も含めてすべて、職員学生のみならず、その家族にも開放されていたことです。このことは、特に、留学生の家族にとってよい勉学の機会を与えてくれたように思います。

以上、私なりの狭い経験の中から、海外の図書館の事情を述べてみました。いろいろな規模及びシステムを持った図書館がありますが、それはその大学あるいは研究所の人々の学問観をそのまま反映していると言えましょう。(物理)

おねがい

閲覧規程第9条によりますと、教官貸出図書の返却期限は1年以内、および貸出冊数は50冊以内となっています。現在かなりの図書が期限切れとなつたまま貸出されていますので、至急返却をお願いいたします。また、制限を越えて図書をお持ちの教官は一度整理をお願い致します。図書館資料は、共同利用のものであつたということをごま一度考えて下さい。

— 私のすすめたい本・37 —

事実を知るということ

教養部 渡 辺 安 夫

ソクラテスの妻クサンチッペが、類まれな悪妻であるという話は、ひろく喧伝されている。

アルキピアデスが、「クサンチッペの小言はうるさくて、とても聞いていられない」というと、

「もう、私は慣れっこになっている。まあ、始終滑車がガラガラいうのを聞いているようなものさ」とソクラテスは言い、「君だって驚鳥がガアガアいうのを、結構我慢して聞いているじゃないか」と言ったという。

クサンチッペは口やかましい女で、些細なことにもつべこべ言い、挙句の果てにはヒステリー状態に陥るのがつねだった。怒鳴り続けていたクサンチッペは、遂に業をにやし、容器の水をソクラテスの頭にぶっかけた。しかし、ソクラテスは、「神鳴りのあとには、決まって雨が降るものさ」と口のなかで呟くだけだった。

こういう話は、あちこちによく書かれているし、おもしろいといえば、おもしろい話である。

クサンチッペ悪妻説のもとになる話は、いろいろあるらしい。例えば、ヂオゲネス・ラエルチオスあたりがそのような話のいくつかを伝えており、それに脚色されたり、なにかしたものが伝わり伝わっているのだというし、クセノポンの『饗宴』*のなかでも、クサンチッペはおよそ女という女のなかで最も難物な女であるということ、アンチステネスという人物が、当のソクラテスに言う場面が出てくるという。

しかし、クサンチッペは、事実、本当に悪妻だったのだろうか。悪妻説の拠りどころとなるいくつかの小話は事実そのままに記しているのかどうか、という点[†]になると、どうも疑問が出てくるのである。クセノポンの『思い出』のなかの、息子であるランプロクレスが母親を譏る話にしても、親の恩について一つの教訓をソクラテスに語らせるために、クセノポンが創作したのだ、とも考えられる。クサンチッペ悪妻説でもう一つ見落すことができないのは、この説が哲人ソクラテスを賞讃し、誉め称えることと関連して出てくることである。悪妻説が仕立てられてゆくその裏側で、ソクラテスが古今未曾有の哲人にされてゆく面があることは、やはりどうしても否定でき

ないのである。漱石夫人悪妻説というのがあって、それがどうやら漱石崇拜者のあいだから多く出ているらしいことと考えあわせると、これは実に興味深いものがあるのである。

ここで、私はながながクサンチッペにかかずらうつもりはない。おおかたの人にとっても、彼女が悪妻であるとかないとかいう話は、どちらでもよいに違いない。“事実を事実そのままに知ることは、そんな簡単ではない。”私は、このことを学生諸君に訴えたかったのである。

ソクラテスとクサンチッペについて上に書いたことは、その殆どが田中美知太郎博士の『ソクラテス』* (岩波新書)にある話である。クサンチッペは本当に悪妻であったのか。博士はこの疑問に正面から挑み種々考証を試みておられる。勿論、ここに書かれていることは、これだけではない。自分自身では一冊の書物も残さなかったソクラテスについて、“何をどこまで知ることができるか”から始め、その“生活的事実”等々が刻明に描かれているのである。その考証を辿り、事実認識の過程をつぶさに学ぶことを、私は、学生諸君におすすめしたいと思う。 (哲学)

生物化学への誘い

農学部 水 野 卓

生物化学(生化学)は、化学という言葉で生物性や生命現象を解明しようとする科学であり、生物(動・植・微生物)体を構成している物質(分子)の構造や機能を明らかにし、それらの合成、変換、エネルギー代謝など生体反応の仕組みを分子レベル(酵素反応系)で解明し、遺伝、免疫から発生、生長、老化などの生命現象の本質にも迫ろうとする広くて深い学問領域で、一筋縄で行くものでなく、その道は多岐で峻しいものである。

生物化学にとり着くには、先ず、生物と化学を基盤としたガイドブックが必要になる。志村憲助ほか著:生物化学*[朝倉];寺山 宏著:基礎生化学*[裳華房]などがこれで、基礎事項を一通り把握するための教科書である。さらに、深入りするために世界的レベルのテキストをお勧めしたい。コーン・スタンプ生化学*、田宮信雄ほか訳〔東京化学同人〕;レーニンジャー生化学上、下*、中尾真監訳〔共立出版〕などほん訳本であるが、できれば外国語による原著(E. E. Conn, P. K. Stumpf: Outlines of Biochemistry, [Wiley]; A. L. Lehninger: Biochemistry, The Molecular

Basis of Cell Structure and Function*, (Worth Pub. Inc.) を読破されると良い。

生化学の分野に関係する化合物や反応は、種類も多く煩雑で、これらを正確に押え理解するのに便覧や辞典ものが役に立つ。生物化学ハンドブック*；有機化学ハンドブック*〔技報堂〕；生化学データブック I*、II〔東京化学同人〕；化学大辞典全 10 巻*〔共立出版〕；岩波生物学辞典*、岩波理化学辞典*〔岩波〕；CRC Handbook of Biochemistry〔CR Co.〕；Data for Biochemical Research〔Oxford Clarendon Press〕；The Merck Index*〔Merck & Co.〕などを座右にすべきである。

進学、就職など受験用には、化学研究会編：生化学演習〔広川〕；上代皓三著：生化学演習〔技報堂〕；ケーリッジ等編、野田春彦訳：精解生物化学演習*〔共立出版〕の一読で効果が挙ろう。

専門課程や大学院での生化学の実験や研究には、日本生化学会編：生化学実験講座全 17 巻*〔朝倉〕；安藤鋭郎等編：生化学研究法 I*、II*〔朝倉〕などが、また専門雑誌として生化学*〔日本生化学会〕；化学と生物*〔日本農芸化学会〕；ファルマシア*〔日本薬学会〕；蛋白質核酸酵素*〔共立出版〕；化学の領域*〔南江堂〕などを、また、学会誌としては、Journal of Biochemistry*〔日本生化学会〕；Agricultural and Biological Chemistry*〔日本農芸化学会〕；それに外国の、Journal of Biological Chemistry*〔米国生化学会〕；Science*〔米国〕；Nature*〔英国〕など毎号目を通し興味あるトピックスはカード式にでもして整理して置くべきである。また、過去の研究成果を一括して調査整理するのに日本化学総覧*、科学技術文献速報*（化学・化学工業編、外国編、国内編）、特許総覧、外国特許速報 化学編；Chemical Abstracts, Biochemical Section*〔米国化学会〕の通覧も欠かせない。

以上、生物化学を勉強し、研究者や技術者になりたいという学生へ勧誘のつもりで、本学図書館や学部図書室に配架されている生化学関係の教科書、参考書、実験書、学会誌など目ぼしいもの 2、3 冊ずつお推めした次第である。生化学の勉学に図書館蔵書の有効利用を願って止まない。

(生物化学)

*印は本館所蔵

■昭和 55 年度編集委員

豊川卓蒨（館長）・本間重紀（人文学部）・
須貝静直（教育学部）・下村一夫（整理係）・
藤田みよ子（運用係）・塚本雅美（参考調査係）・
山川玲子（受入係）

大学図書館の夜間開館によせて

—小村浩夫氏の「疑問」を考える—

人文学部 安藤 実

このたび静岡大学図書館が、不十分ながら夜間延長開館の実施にふみ切ったのは、たいへん良いことだと思う。豊川館長はじめ、図書館職員や関係の方々に対し、心からお礼を申し上げたい。『図書館通信』第 50 号の特集によせられている学生たちの感想文も、素直なよろこびに満ちていて、共感させられる。

しかしこの措置に対し、必ずしも賛成しない向きもある。同じ特集のなかの小村浩夫氏の「疑問」と題する一文は、その例である。

小村氏の「疑問」の要点は、延長開館の要求が学生たちから出たというより、一部の教官、それも夜、大学図書館で勉強したという「ロマンチック」な思い出をもつ人が「経験を伝承」させようということから出ている、というところにある。学生たちの要求もないのに、一部教官の好き心から延長開館となった、現に学生の利用も少ないそうだが、気の毒なのは、その結果労働強化に追い込まれ、分断政策にさらされている図書館職員だ、というのがその論法である。

これはまことに奇妙な「疑問」というほかない。第一に、静岡大学の学生は、年来、夜間延長開館の実現を要求してきた。それを拒否してきたのは、大学当局であった。第二に、図書館利用度は利用の便宜と関連している。利用度が低いとすれば、それは利用しにくかったからである。慣行があらたまるのに時間がかかるというだけのことである。

静岡大学図書館は、このたびの延長開館の前の段階では、学生への利用サービスという面で、国立 76 大学図書館のうち、最低の部類に属していた。1975 年を例にとると、学生 1 人当り年間館外貸出数は 2 冊、全国第 75 位、週間平均図書館開館時間は 44 時間で、全国第 70 位であった。

大学図書館は、ある意味でその大学の文化活動の象徴である。それは利用されることに存在意義がある。利用される方法の一つが、夜間延長開館である。

もちろん延長開館には、人手も要るし、経費もかかる。そのことを理由に延長開館そのものをサボってきたのが従来のやり方であった。このたびは学生アルバイトの使用という便法で、そこを突破したわけである。

もし小村氏が主張するように、そういう便法は職員のあいだに格差と分断をもちこむことになるので、定員増をふくめ、諸条件が満たされないうかり、延長開館をやるべきでないという立場を取るならば、果していつ静岡大学図書館の夜間開館が実現するのであろうか。それは限りなく空論に近い正論である。迷惑するのは、わが静岡大学の学生だけであろう。

学生アルバイトの使用は、現状においては少なくとも次善の策であり得る。豊川図書館長はじめ関係者が、あえて次善の策を採用し、延長開館にふみ切ったのは、学生の教育に責任をもつ立場を深く自覚されてのことだと思われる。

われわれは理想的条件の確保を求める努力を決して放棄しないが、同時にまた、与えられた条件のもとで理想を求めるしごとを続けている。学生アルバイトによる延長開館は満足すべき第一歩ではないにせよ、やはり前進にはちがいない。このたびの延長開館が、静大図書館の単なる量的な機能の拡大にとどまらず、その質的再生の契機となることを期待したいと思う (財政学)

■自然科学系外国雑誌の利用について

自然科学系の雑誌の集中化が、関係教官の御協力のもとで実現する運びとなりました。『図書館通信』第49号で図書館としての計画をお知らせしたように、3階のフロアーを自然科学系雑誌室とし、教官ならびに学生は自由に出入りできるようになっております。延長開館中、月～金は20時45分まで、土は16時45分まで、4階5階の閲覧室と同様御利用いただけます。以下は外国雑誌利用についての案内です。

1. 新刊雑誌架への配架： 最近号のみ雑誌架の前面に配架され、前年分および今年の前号までの分は、雑誌架ボックスの中に所蔵してあります。ただし所蔵できない場合およびサイズの大きい雑誌 (Math. Rev. その他) は、書架に配架してあります。
2. 書架への配架： 前々年分およびそれ以前の分は、書架に配架してあります。
3. 貸出： 教官については、前々年までの雑誌は借りることができます。期限は1週間です。貸出を受ける場合は、4階運用係にて所定の貸出カードで手続して下さい。
4. コピー： カウンターキーが4階の運用係にあります。教官は、使用のつと氏名・枚数を所定の用紙に記入して下さい。使用後はカウンターキーを係まで戻して下さい。学生は

参考調査係で複写依頼をして下さい。

5. 問合せ： 雑誌についての問合せは、新着雑誌については4階受入係、閲覧については同階の運用係にして下さい。

■浜松分館だより

フィルム・ライブラリー利用開始にあたって浜松分館では、今年度から日本科学技術振興財団の科学技術館フィルム・ライブラリーを利用いただけるよう、その窓口業務を始めることに致しました。

これは、工学部教育制度委員会からの要請によるもので、フィルム・ライブラリー所蔵の教育用映画を借り出し、講義・セミナー等のより充実を計ろうとするものです。

利用方法については「利用のしおり」を作成し、別に御案内致しますが、ここで簡単に紹介しておきます。

まず、借用希望フィルムを浜松分館及び教育制度委員会に備えてあります「科学技術映画目録」により選択してください。

フィルムが決まりましたら、映写日を決定し、浜松分館へ利用申込書を提出してください。予約は3ヶ月前から可能です。

借用期間は最高5日間ですが、発送、返送日数も含まれていますので、分館との連絡を速やかにかつ確実にし、返還遅延等のないようお願いします。

料金の支払いは、工学部共通費から支出し、取扱事務は用度係にて行います。

フィルムの映写は利用者にお願いしますが、浜松分館視聴覚室は座席数69席、16ミリ映写機をはじめ、8ミリ、スライド、オーバーヘッド等が設置されていますので、これを機会によりいっそう御利用いただければと思います。

■教官著作寄贈図書

原秀三郎 (人文学部)

『日本古代国家史研究—大化改新論批判』

原秀三郎著 東京大学出版会 1980
(210.3/H 31)

吉原崇恵 (教育学部)

『解説 現代家庭科研究』

大学家庭科研究会編 青木書店 1980
(375.5/D 16)

加藤一夫 (教養部)

『経済学原理 第一編』

(初期イギリス経済学古典選集9)

ジェームズ・ステュアート著/加藤一夫訳

東京大学出版会 1980
(331.315/St 5/1)

村松茂男 (教育学部・非常勤)

『遊び・学び・働く・せいっぱいの教育』

村松茂男著 学苑社 1979

(378.4/Mu 48)

■図書館委員会報告

昭和 55 年度 第 1 回 S. 55. 5. 6

1. 昭和 55 年度図書館経費について

「図書館経費の配分及び負担等の基準」について、種々審議した結果、各部局の意向を伺うこととし、次回委員会に図書館経費(案)を提示し検討することとした。

2. 昭和 56 年度概算要求事項について

附属図書館においては、人員増を要求することとした。

3. 学生用図書購入費等の配分方針について

従来どおりとした。

4. その他

(1) 静岡大学附属図書館「図書館通信」は、従来どおり年 4 回発行することにした。

(2) 外国雑誌小委員会を設置することにした。

昭和 55 年度 第 2 回 S. 55. 5. 26

1. 昭和 55 年度図書館経費について

図書館経費の配分及び負担等の基準について審議の結果、従来どおりの方針とした。

予算案は各部局に持帰り検討願うこととした。

2. その他

外国雑誌小委員会は、東部地区図書館委員の中から、4 名の委員で構成された。

■附属図書館委員会委員 (昭和 55 年度)

| 所 属 | 委員会名 | 図書館委員会 | |
|-------|------|--------|-------|
| 館 | 館長 | 豊川卓爾 | |
| 分館 | 分館長 | 大月卓郎 | |
| 人文学部 | | 村松真一 | 本間重紀 |
| 教育学部 | | 須貝静直 | 広田文彦 |
| 理学部 | | 森口治生 | 白井古希男 |
| 工学部 | | 堀部安一 | |
| 農学部 | | 細井寅三 | 岩川治 |
| 教養部 | | 鎌田哲宏 | 佐々木敏光 |
| 電子研 | | 渡辺健蔵 | 山本達夫 |
| 法経短大 | | 望月昌吾 | |
| 電子科学研 | | 助川徳三 | 野畑金弘 |
| 本部 | | 事務局長 | |
| 図書館 | | 事務部長 | |

■増加図書統計 (昭和 54 年度)

() 内は昭和 54 年度末の累計

本館：増加冊数は年々増えてきている。昨年度に比して、全体 4,206 冊(18.7%増)、内和漢書 3,079 冊(21.2%増)、洋書 1,127 冊(14.1%増)の増加となっている。各主題では、総記と哲学関係は減少しているが、他は増加しており、特に社会科学が增加部分の 36%を占めている。蔵書全体では、社会科学、自然科学、文学の順で多く、和漢書もそれに従うが、洋書では、自然科学、社会科学、文学の順となっている。54 年度の各主題の増加も例年通りであるが、和漢書の中では社会科学が、洋書では自然科学が、それぞれの 30%を超えている。自然科学部門は、洋書が和漢書より冊数が多い。

| | 本 館 | | | 派 松 分 館 | | |
|------|---------------------|--------------------|---------------------|-------------------|-------------------|--------------------|
| | 和 漢 書 | 洋 書 | 計 | 和 漢 書 | 洋 書 | 計 |
| 0 総記 | 502 (27,542) | 447 (7,172) | 949 (34,714) | 109 (2,983) | 13 (774) | 122 (3,757) |
| 1 哲学 | 919 (16,375) | 557 (9,499) | 1,476 (25,874) | 31 (2,800) | 18 (476) | 49 (3,276) |
| 2 歴史 | 1,620 (30,912) | 407 (5,181) | 2,027 (36,093) | 45 (1,528) | 1 (210) | 46 (1,738) |
| 3 社会 | 5,987 (84,286) | 2,606 (21,213) | 8,593 (105,499) | 54 (3,067) | 7 (419) | 61 (3,486) |
| 4 自然 | 2,804 (42,412) | 2,974 (32,861) | 5,778 (75,273) | 865 (18,093) | 1,173 (21,140) | 2,038 (39,233) |
| 5 工学 | 924 (14,209) | 159 (2,065) | 1,083 (16,274) | 1,232 (25,022) | 692 (16,161) | 1,924 (41,183) |
| 6 産業 | 1,350 (25,896) | 255 (5,089) | 1,605 (30,985) | 12 (536) | 1 (8) | 13 (544) |
| 7 芸術 | 859 (12,805) | 61 (2,094) | 920 (14,899) | 22 (1,593) | 2 (267) | 24 (1,860) |
| 8 語学 | 552 (11,544) | 390 (7,019) | 942 (18,563) | 70 (2,748) | 44 (2,115) | 114 (4,863) |
| 9 文学 | 2,116 (36,515) | 1,257 (23,294) | 3,373 (59,809) | 77 (3,586) | 0 (1,213) | 77 (4,799) |
| 計 | 17,633 (302,496) | 9,113 (115,487) | 26,746 (417,983) | 2,517 (61,956) | 1,951 (42,783) | 4,464 (104,739) |

■利用統計 (昭和 54 年度)

(1) 利用者統計 (本館)

学生の年間貸出総冊数のうち、教育学部の学生が約 1/3 の 13,000 冊の貸出を受けており学部で最高となっている。次に人文学部が 11,000 冊、理学部が 7,000 冊、農学部が 2,000 冊という順になっている。しかし 1 人当たりの平均貸出冊数を見ると、教養課程においてはどの学部共ほぼ 5 冊程度であるが、専門課程に行く順序は逆転し、理学部 15 冊、人文学部 14 冊、教育学部が 9 冊となっている。農学部は他学部と比べると利用が低くなっている。いずれにしても、前年度に比べ貸出総冊数が 8,000 冊ほど伸びていることは喜ばしい。

(月別一日平均在館者数)

| 区分 | 18時(土:14時) | 20時(土:16時) |
|----|------------|------------|
| 2月 | 79.5人 | 46.4人 |
| 3月 | 12.6人 | 10.1人 |
| 4月 | 42.9人 | 24.1人 |
| 5月 | 50.0人 | 35.6人 |
| 6月 | 53.4人 | 36.3人 |

| 区分 | 利用者数 | 閲覧(冊数) | | 貸出(冊数) | | | |
|-----|--------|--------------|--------|--------|-----------|--------|--------|
| | | 出納 | 開架 | 指定 | 出納 | 合計 | |
| 学部 | 人文 | 548 | 4,932 | 4,398 | 969 | 2,070 | 7,437 |
| | 教育 | 946 | 3,675 | 5,338 | 1,137 | 1,716 | 8,191 |
| | 理 | 348 | 398 | 3,547 | 1,464 | 191 | 5,202 |
| | 農 | 296 | 39 | 529 | 207 | 10 | 746 |
| 生 | 人文 | 642 | 871 | 2,068 | 818 | 307 | 3,193 |
| | 教育 | 1,033 | 741 | 3,011 | 1,303 | 276 | 4,590 |
| | 理 | 374 | 286 | 1,203 | 985 | 107 | 2,295 |
| | 養農 | 292 | 91 | 654 | 520 | 30 | 1,204 |
| | 工 | 909 | 193 | 1,727 | 2,097 | 105 | 3,929 |
| 院生等 | 166 | 259 | 227 | 41 | 94 | 362 | |
| 小計 | 5,599 | 11,485 | 22,702 | 9,541 | 4,906 | 37,149 | |
| 教職 | 教員(職員) | 418 (351) | — | 483 | 開架に 含む | 5,276 | 5,759 |
| 職員 | 研究員 | — | — | — | — | 9,597 | 9,597 |
| 職員 | 小計 | 769 | 0 | 483 | 0 | 14,873 | 15,356 |
| 学外者 | — | 247 | — | — | — | — | — |
| 合計 | 6,368 | 11,732 | 23,185 | 9,541 | 19,779 | 52,505 | |

(4) 文献複写統計 注: 外国への複写依頼は除く。

| 区分 | 本館 | | | 浜松分館 | | |
|----|-----------|--------------|-----------------|------|-----|-------|
| | 人数 | 件数 | 枚数 | 人数 | 件数 | 枚数 |
| 依頼 | 学生 879 | 448 1,019 | 3,542 19,414 | 291 | 548 | 5,118 |
| 受託 | 学内 512 | 2,444 696 | 13,702 6,924 | 343 | 557 | 5,279 |

(5) 外国への複写依頼 (本館) (6) 相互貸借冊数 (本館)

| 区分 | 件数 | 枚(コマ)数 |
|----|-----|--------|
| 学生 | 5 | 235 |
| 教官 | 168 | 5,153 |

| | |
|----|------|
| 貸出 | 8冊 |
| 借用 | 184冊 |

(2) 分類別統計 (学生)

本館 (冊数)

| 区分 | 閲覧 出納 | 貸出 | | |
|------|----------|--------|-------|--------|
| | | 開架 | 指定 | 合計 |
| 0 総記 | 203 | 373 | 99 | 554 |
| 1 哲学 | 411 | 1,091 | 520 | 2,116 |
| 2 歴史 | 670 | 1,601 | 709 | 2,721 |
| 3 社会 | 1,629 | 5,813 | 1,240 | 8,413 |
| 4 自然 | 389 | 6,699 | 4,949 | 11,974 |
| 5 工学 | 225 | 996 | 667 | 1,806 |
| 6 産業 | 155 | 391 | 204 | 733 |
| 7 芸術 | 144 | 882 | 212 | 1,227 |
| 8 語学 | 425 | 778 | 315 | 1,336 |
| 9 文学 | 2,292 | 4,078 | 626 | 6,269 |
| 雑誌 | 5,189 | — | — | — |
| 合計 | 11,732 | 22,702 | 9,541 | 37,149 |

分館 (冊数)

| 区分 | 貸出 | 貸出 | 貸出 |
|------|-----|------|--------|
| 0 総記 | 257 | 4 自然 | 40 |
| 1 哲学 | 18 | 5 工学 | 277 |
| 2 歴史 | 139 | 6 産業 | 7 |
| 3 社会 | 59 | 7 芸術 | 60 |
| | | 合計 | 10,104 |

(3) 延長開館中の在館者数 (2月~6月)

2月~6月の延長開館中の利用者数であるが、やはり試験期の2月が最高で、18時現在で79.5人、20時現在で46.4人となっている。3月は試験も終り、春季休暇を控えているためか、利用者は10人前後と急減している。4月からは徐々に増え始め、だいたい平均的な数値がでている。また、表に書かれていないが、一週の内、土曜日の利用者が最も多く、通常日の2倍近い日もある。

お知らせ (本館)

(1) 夏季休業中の貸出について

貸出冊数: 4冊まで
貸出開始日: 7月1日(火)
返却期限: 9月3日(水)

(2) 休館

7月21日(月)~26日(土)、30日(水)~31日(木)

なお夏季休業中の7月21日(月)~8月30日(土)までは、延長開館を行いません。

■人事異動 (本館)

転任 (55.4.1付)

前 畑 典 弘 閲覧課長→神戸大学附属図書館
閲覧課長

昇任 (55.4.1付)

近藤 禧 男 京都大学整理課受入掛長→
閲覧課長

採用 (55.3.21付)

山本 孝 閲覧課参考調査係
配置換 (55.5.1付)
鷹野 三男 整理課総務係長→工学会計係長
池谷 元志 電子工学研究所会計係長→
整理課総務係長
鈴木 光男 教養部会計係→整理課受入係
加藤 欽也 整理課整理係→閲覧課運用係
畠山百合子 整理課受入係→整理係